

長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡広報発表資料

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所

所在地：京都市伏見区淀水垂町地内

調査期間：2021 年 11 月 15 日～2022 年3月 31 日

調査面積：1,640.5 ㎡（1 区 103 ㎡、2 区 1,537.5 ㎡）

調査対象予定面積：約 15,000 ㎡

1. はじめに

本調査は、国土交通省淀川河川事務所が淀川水系河川整備計画に基づき、桂川の洪水時における治水安全度を向上させるための河積拡大（掘削工事）に伴うもので、調査地は、長岡京跡・淀水垂大下津町遺跡に該当します。京都市による試掘調査で工事計画地の一部に遺構・遺物が確認されたため、当研究所が発掘調査を実施しました。なお、調査期間が非出水期に限定されることから、調査は数か年に分けて実施する計画となっており、2021 年度の調査は初年度にあたります。

現在、調査地は桂川右岸の河川敷に位置していますが、明治 33 年(1900)まで水垂村の集落が存在していました。水垂村は、南側の大下津村、対岸の納所村とともに、平安京・京都の外港として栄えた「淀津」の推定地で、江戸時代には淀城の城外町となり、桂川に沿って町家や興杼神社が建ち並び、淀川水系を利用した交通の拠点として栄えていたことが絵図や文献資料から明らかとなっています。現状でも江戸時代の絵図に描かれた石積み護岸と考えられるものが肉眼で観察できることから、江戸時代の遺構・遺物の出土が予想されていました。

2. 調査成果（図2～5）

2021 年度は、宮前橋の北側と南側にそれぞれ1箇所ずつ調査区を設定し、南側を1区、北側を2区としました。1区では2面、2区では 10 面の遺構面（生活面）を確認し、弥生時代から明治時代までの遺構・遺物が断絶することなく、良好な状況で残されていることが判明しました。調査前の想定より、遺構面数が大幅に増加したことから未調査の部分がありますが、以下で現在までに明らかになった各時代の遺構・遺物についての概要を記します。なお、2区の東半は近代以降に人工的に削平されて低くなっていることから、2区西半と東半では検出面が異なっています。東半では弥生時代から奈良時代、西半では室町時代から明治時代の遺構面の調査を行いました。

(1) 弥生時代（図4、写真3）

2区東半で弥生時代中期（約 2200 年前）の土坑 2440・2492、落込み 2392（下層）などが見つかりました。各遺構から出土した土器には、現在の大阪府や東海地方で作られた土器が含まれていました。また、石器の未製品や管玉の原材料である加工痕のあるグリーンタフ（緑色凝灰岩）が出土し、石器や玉などの生産活動を行っていたと考えられます。

(2) 古墳時代（図4、写真3・4・5）

2区東半で古墳時代初頭の竪穴建物6棟（竪穴建物 2240・2355・2356・2368・2400・2410）や落込み 2392（上層）、古墳時代後期の溝 2325 などが見つかりました。各遺構から出土した土器には、現在の大阪府や滋賀県、東海地方で作られたものが含まれていました。

(3) 飛鳥時代（図4、写真5・6）

2区東半で掘立柱建物 2154 や流路 2353 が見つかりました。掘立柱建物 2154 の建物規模は、東西3間 × 南北2間で北側に庇を持ちます。柱穴から須恵器の長頸壺が出土しました。

(4) 奈良時代（図4、写真5・6）

遺構は確認されていませんが、奈良時代初め頃の土器が出土しました。

(5) 平安時代（図4）

2区東半で平安時代前期の土坑 2326 や溝 2187 が見つかりました。土坑 2326 は形状や遺物の出土状況から墓の可能性あります。また、鎌倉時代の井戸から平安時代後期の瓦がまとまって出土しました。

(6) 鎌倉時代（図3・5、写真7・8）

1区で流路 1017、2区東半で井戸 2225、溝 2090 が見つかりました。井戸 2225 は、掘形の径4m以上、深さ約 3.6m以上の縦板組井戸で、構築材として瓦が多量に使用されていました。

(7) 室町時代・安土桃山時代（図3・5、写真2・7）

1区では鉄精錬炉 1013 と炉壁や滓を廃棄した土坑 1011・1014 が見つかりました。2区では、東西方向の堀 2123 と南北方向の堀 2299・2350 が見つかりました。堀の幅は4m以上、深さは約2mあり、いずれも2回から3回の掘り直しが確認できました。約 150 年にわたって維持され、最終的に安土桃山時代に入って埋められたようです。堀からは輸入陶磁器を含む多量の土器類や瓦類のほか、卒塔婆や柿経など宗教行為に関係する特徴的な遺物が出土しました。

(8) 江戸時代（図3・5、写真9）

1区で護岸 1001、2区東半で護岸 2125 が見つかりました。これらは一連の遺構と考えられ、江戸時代の絵図に描かれた石積み護岸が良好に遺存していることがわかりました。2区西半では地業 2010・2011・2012、井戸 2001 などが見つかりました。地業は蔵の基礎部分の可能性が考えられます。

(9) 明治時代（図5、写真 10）

2区西半で地業 2135 や井戸 2138 が見つかりました。地業 2135 は長さ 15m以上、南北幅約9mあります。河川の護岸に用いられる粗朶沈床（粗朶単床）工法と呼ばれる工法と類似した方法で地盤改良が行われていました。

3. まとめ

今回の調査によって、調査地が弥生時代から明治時代までの 2,000 年以上にわたり、人々の営みがほぼ途切れることなく続いていた場所であったことが明らかとなりました。とくに、遺跡が削平される可能性の高い河川敷と言う環境下にありながら、これだけ長期間にわたって各時代の生活面が良好な状態で残されていた遺跡の調査例は全国的に見てもありません。なかでも、各時代の遺構・遺物は、地域間の流通や交流、また社会変動を通史的に検討し得る極めて重要な情報を提示してくれました。

本調査で確認した平安時代後期の瓦が出土した井戸、室町時代の大規模な堀、鉄精錬炉の存在や、柿経や輸入陶磁器などの多種多様な遺物の出土は、一般的な集落跡でみられる遺構・遺物の様相と大きく異なります。また、土地利用の継続性の高さや、桂川・宇治川・木津川の三川合流域に近い水運を利用した交通の要衝であるという地理的なことを勘案すれば、本調査地周辺は冒頭で述べた「淀津」の一角であった可能性が高いと考えられます。史料上の、「淀津」の初見は『日本後紀』延暦 23 年（804 年）のことになります。淀津は、淀川から桂川・宇治川・木津川を経由する水運の拠点となる重要な港町であり、中近世を通して交通・軍事の要衝として栄えたとされています。特に、中世以降は木材、鉄材の中継拠点としても繁栄したとされ、今回の調査でみつかった鉄精錬炉の存在はそれを裏付ける遺構として注目されます。また、弥生時代から古墳時代に近畿一円や東海地方で作られた土器がこの地に運び込まれていることから、文献上に「淀津」が登場する以前から当地が遠隔地との交流拠点であったこともわかりました。

2021 年度の調査面積は全調査予定面積の約1割に過ぎませんが、文献史料でしか知り得なかった「淀津」の実態について、考古学的な立場から検討することを可能にしてくれる貴重な成果を得ることができました。淀は、平安京・京都の玄関口にあたりますが、これまで中世以前の遺跡はほとんど確認されていませんでした。今回の調査成果は、港湾遺跡のあり方を通史的に検討し得る極めて重要なものであり、今後の調査では、考古学のみならず地理学・文献史学などの関連分野とも協力し、遺跡の具体像をより明らかにしていく必要があると考えています。

表1 淀周辺関連年表

延暦23年	804	桓武天皇が淀津へ行幸する。(『日本後紀』)
大同5年	810	菓子の変の際に、「与度市津」に兵が置かれる。(『日本紀略』)
貞観元年	859	「與度神」正六位上から従五位下に昇叙。(『日本三代実録』)
貞観16年	874	淀渡口廻りの人家、三十余軒洪水で流される。(『日本三代実録』)
寛弘6年	1009	この頃から「東西淀」という表現が使われはじめる。(『御堂関白記』)
仁安3年	1168	この頃「問男」と呼ばれる輸送業者が存在していた。(『兵範記』)
寛元年間	1243~1247	淀納所と中島が淀小橋で結ばれる。(『山城淀下津町記録』)
暦応4年	1341	この頃には下津に園城寺領の関が置かれている。(『園城寺文書』)
文明12年	1480	この頃には納所に「よと口の関」と呼ばれる関が置かれている。(『山科家礼記』)
永正元年	1504	薬師寺元一が主君細川政元に反し、淀の城に抛るが敗死。(『細川両家記』)
永禄2年	1559	細川氏綱が淀の城に入る。(『細川両家記』)
元龜3年	1572	細川藤孝が三好三人衆の一人岩成友通が立てこもる淀城を攻撃する。(『細川両家記』)
天正16年	1588	豊臣秀吉が淀に築城を命じる(淀古城)。翌天正17年に修築が完了する。(フロイス『日本史』)
文禄3年	1594	淀古城が破却される。
元和9年	1623	松平定綱が淀城の築城を開始する。(寛永3年(1626)完成)(『徳川実記』)
寛永14年	1637	永井尚政が木津川の河道付け替えを行い、城下町を拡張する。(『淀下津町記録』)
明治元年	1868	洪水後の災害復旧で京都府・淀藩合同で木津川の川違えが行われる。(～明治3年)
明治7年	1874	淀川の河川改修のため、淀城の石垣が解体される。
明治29年	1896	引堤事業により桂川の拡幅が始まる。
明治33年	1900	引堤事業により水垂・大下津町の集落が移転する。
明治35年	1902	與杼神社が現在の位置へ遷座を完了する。

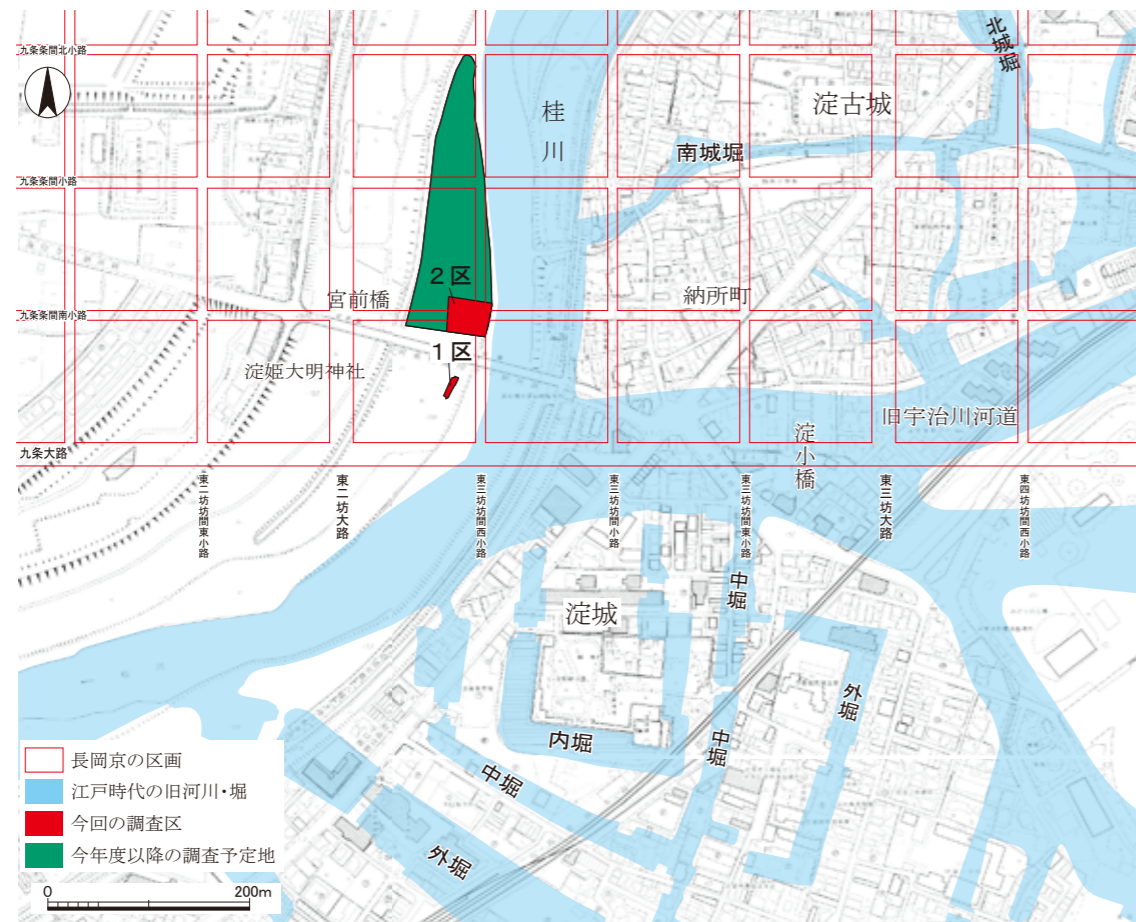


図1 調査地位置図と江戸時代の周辺環境復元図(1:7,500)

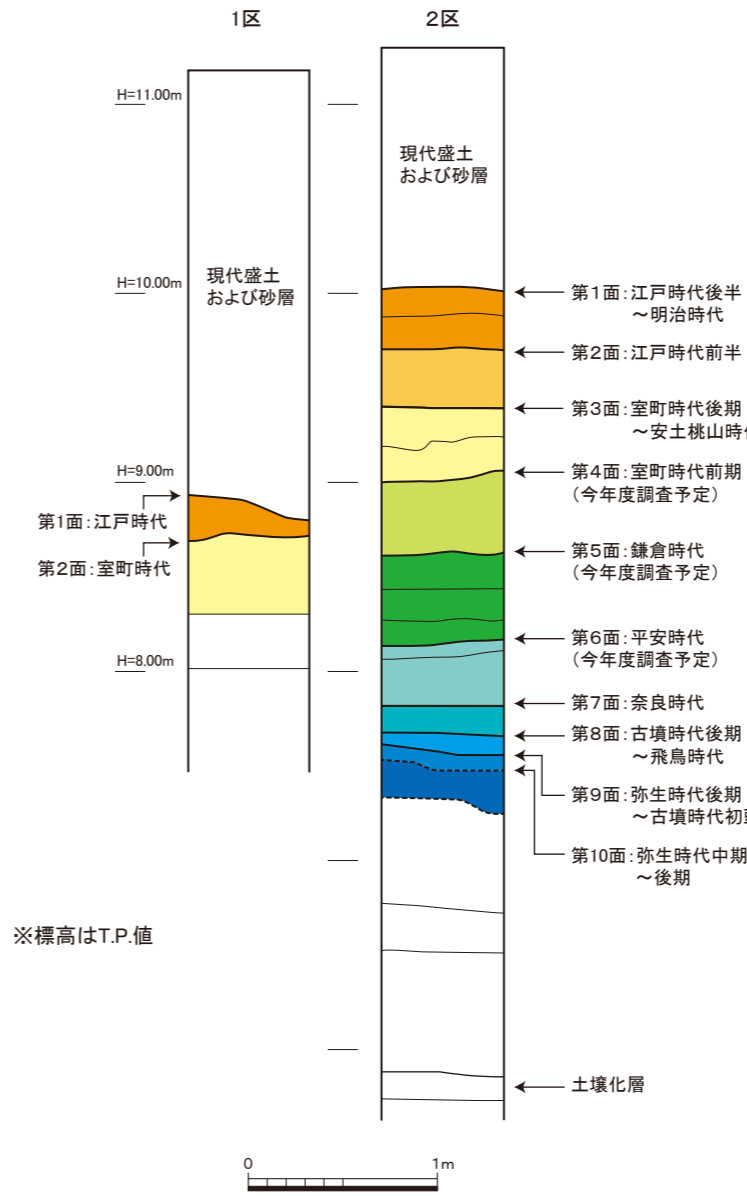


図2 土層模式柱状図(1:40)



写真1 1区第1面全景写真(北から)

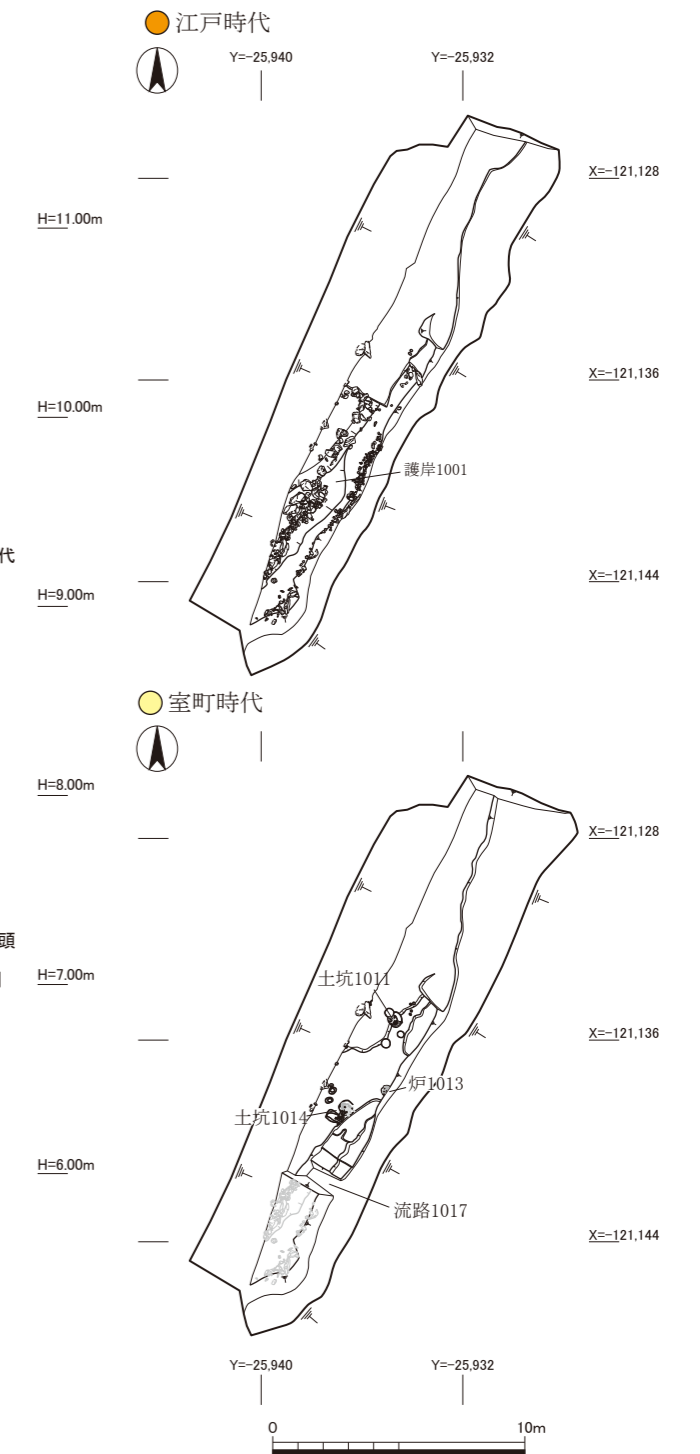


図3 1区調査区遺構配置図(1:300)



写真2 1区第2面土坑1014(北から)

● 弥生時代から古墳時代前期

●●● 古墳時代後期、飛鳥時代、奈良時代、平安時代

●●● 鎌倉時代から室町時代・安土桃山時代

●● 江戸時代から明治時代

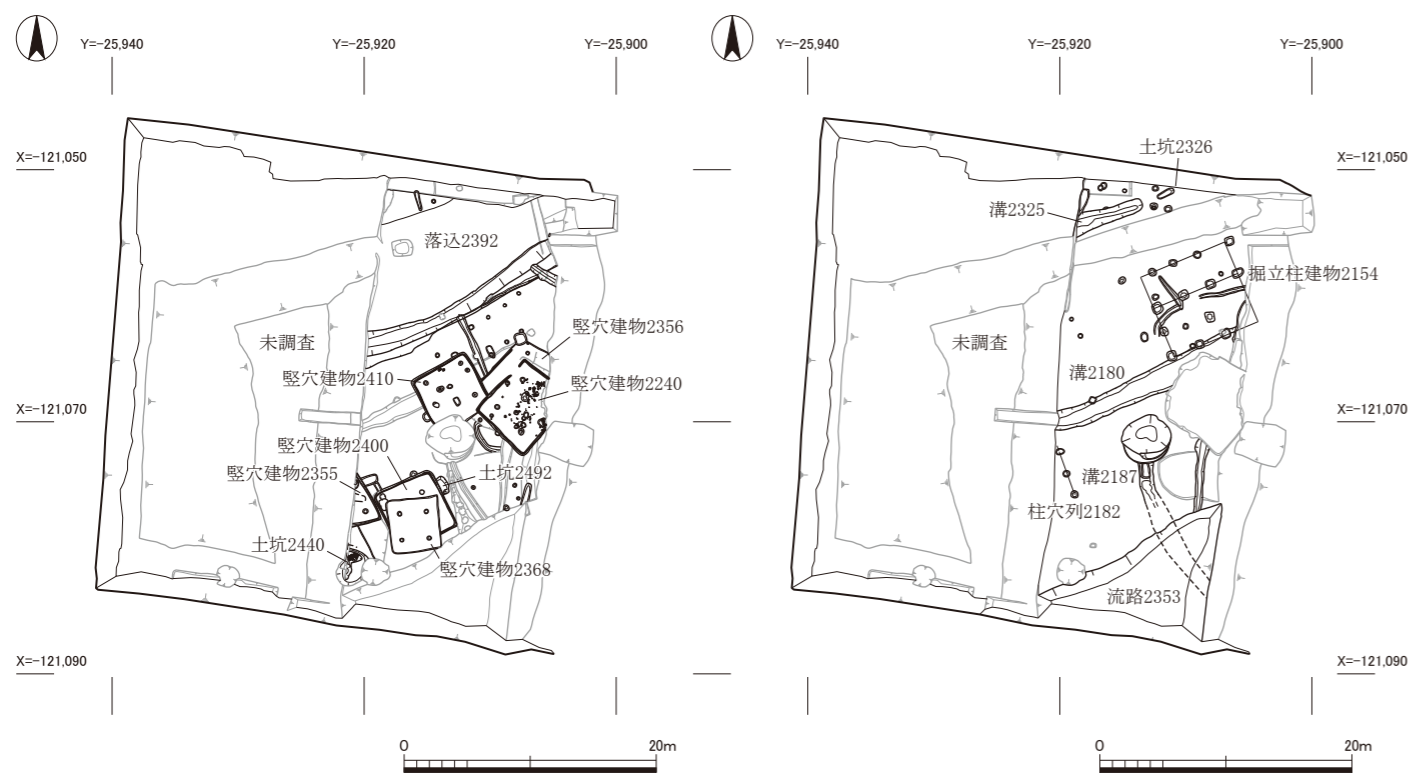


図4 2区調査区遺構配置図1(1:600)

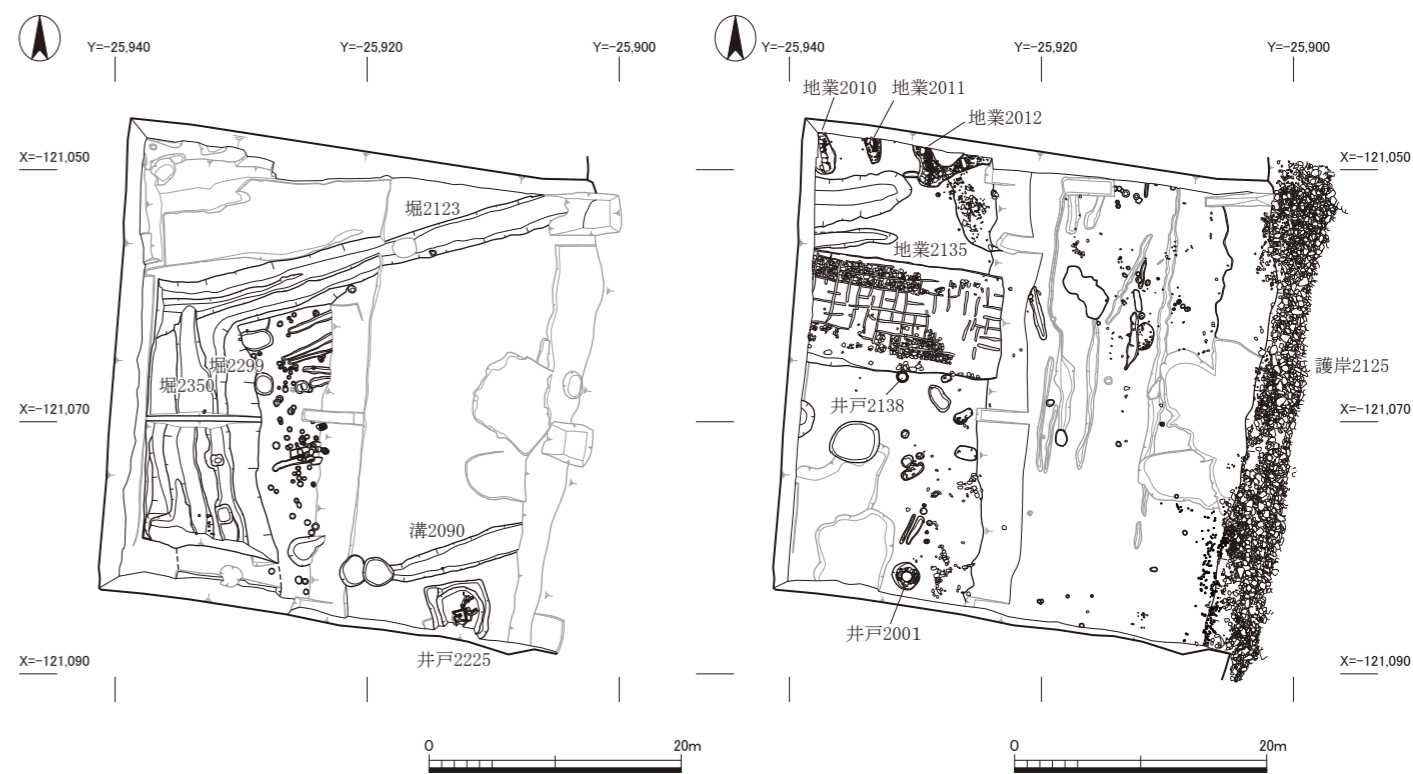


図5 2区調査区遺構配置図2(1:600)



写真3 2区弥生時代から古墳時代前期全景写真(北東から)



写真5 2区古墳時代後期から平安時代全景写真(北から)



写真7 2区鎌倉時代から安土桃山時代全景写真(北東から)



写真9 2区江戸時代全景写真(北から)



写真4 2区竪穴建物2240土器出土状況(南西から)



写真6 2区掘立柱建物2154(南西から)



写真8 2区井戸2225(東から)



写真10 2区護岸2125(北から)